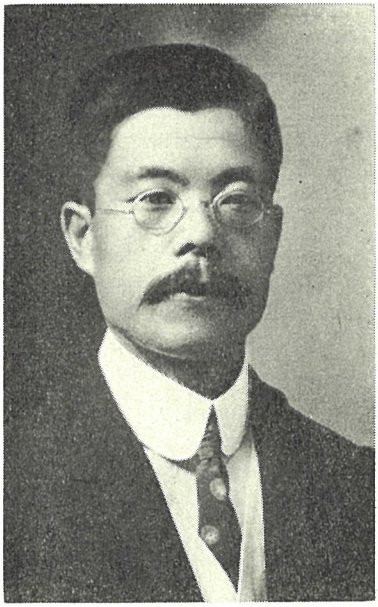


同志社人物誌（50）

中瀬古六郎

末光力作

「同志社百年史」の索引を見ると中瀬古六郎先生は実に三七回にわたって引用されている。それほどに偉大な化学者、科学史家、教育者でありその生涯を同志社に捧げたこの基督者を語るのに、私は決して適任者だとは思っていない。それにも拘わらず私が敢て執筆をお引き受けしたのは、この機会に同志社工学部の一員として現在の工学部の基礎を築いて下さった先生に心からの感謝の思いを表したかったからである。今一つは先生の業績を同志社人、特に工学部に連なる人びとに正当に評価して欲しいと思ったからである。

一九四四（昭和一九）年二月二五日付を以て同志社工業専門学校は文部省の認可を得たが、それに先だつ約一年前、一九四三年五月、太平洋戦争中、理工系学部の充実という社会的要求もあって、同志社理工教育再興調査委員会が発足した。これは同志社ハリス理化学校の廃校以来久しく絶えていた理工学教育を再興しようという企画で、委員長に中瀬古六郎先生、委員の中には加藤与五郎博士、鈴木達也博士といった同志社ハリス理化学校の卒業生の名前が見られる。中瀬古先生は一九四五（昭和二〇）年、天に召されたが念願の同志社工業専門学校の誕生を見届けることができたから、その点心安らかに他界されたことと思われる。一九三〇（昭和五）年「同志社五十年史」が刊行されたが、先生は編纂委員長を務めている。その中で先生は「同志社の成立及び発達」の部門を執筆しているが、「同志社ハリス理化学校」の項にはつぎのような文章が見られる。

新島先生自ら理学士(Bachelor of Science)の称号を戴いてアマースト大学を卒業せられ、居常理科的研究に深甚なる関心を有せられたことを思い、またハリス氏が如何に大なる熱心と前途の希望を抱いて理化学校を起されたかを思うと、吾人今日の状態を顧みて故人に対し痛恨転た痛切なるを感ずるものである。

また、一九四〇(昭和一五)年、新島先生永眠五十周年記念に刊行された「新島先生記念集」の中に「新島先生と科学救国」と題する中瀬古先生のつぎのような文章が見られる。

吾人は今時事変に際して、我が国の理科教育がその応用の全方面にわたって、曰く採鉱冶金、曰く機械土木、曰く電気重工業、曰く化学繊維工業、曰く造船、曰く染色、曰く窯業等等、国家の需要日に益々繁きを加うるに臨み、故先生の科学救国の素志がわが同志社人の手を通じて遂行せらるることの余りにも

少なきにあらざるやを思うて、感慨と痛恨と転た切実なるを禁ずることが出来ぬ。

同志社ハリス理化学校が廃校になったのは一八九七（明治三〇）年であり、同志社工業専門学校が再興したのは一九四四（昭和一九）年であるから、中瀬古先生は実に半世紀近くも「痛恨転た痛切なる思い」を以て過したことになる。それだけに、同志社工業専門学校の設立は先生にとって実に大きな喜びであったに違いない。

中瀬古先生は一八六九（明治二）年、奈良県吉野郡に生まれ、長じて同志社普通学校に学び、同校を一八八九（明治二二）年卒業した。従って晩年の新島先生から薫陶を受けたことになる。ついで翌年九月から新たに開校された同志社ハリス理化学校の助手を一八九六（明治二九）年まで務め、同年七月渡米、メリーランド州ジョンスホプキンス大学に入学した。そこでレムゼン教授に師事して有機化学の研究を行い、一八九九（明治三二）年学位論文「メタサルファミン安息香酸の熱による変化」を提出してPh. D. を得て同大学を卒業した。その後更にエール大学の大学院に入り、生理化学の研究を行い、一九〇一（明治三四）年、マスター・オブ・サイエンスの学位を得た。その間に発表された論文として「イヌリン飼料によるグリコゲンの形成」ならびに「淋巴腺中ニュークレイン酸の研究」がある。

中瀬古先生は一九〇二（明治三五）年帰国し、同志社専門学校、普通学校の教授として同志社教育に貢献したが、前述のようにハリス理化学校はすでに一八九七（明治三〇）年に廃校になっていたので、先生は研究の場を失ったのである。しかし、研究意欲の旺盛な先生は室町通出水の自宅に化学実験室を設け、寸暇を惜んで研究に専念した。「近代化学の父」と言われたフランスの化学者ラボアージェは昼間は政府の徴税官として国税庁に勤務し、夜間は深夜まで研究に没頭して数々の偉大なる業績をあげたが、中瀬古先生の場合もラボアージェ張りの真摯な努力がなされたのである。

有機化学、生理化学の領域を歩んでこられた先生は帰国後、分析化学の面で大きな貢献をされている。即ち、明治中期より先進諸国で発展してきた「金属の微量分析の研究」を自らも研究し、これを我が国に紹介しておられる。英文定性分析指針（一九一八年）、英文定量分析指針（一九二一年）、ならびに微量分析化学（一九二六年）とつぎつぎに著書が刊行された。つぎに、先生の分析化学に関する研究の一例を紹介しよう。

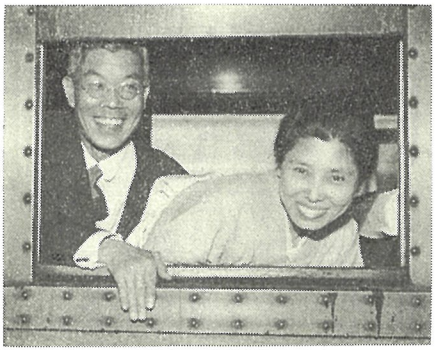
小児科の権威者平井博士が小児脳炎の研究を行なうにあたって、中瀬古先生はこれに協力、その原因が母親の白粉に含まれている鉛に起因することを先生得意の微量分析によって証明したのである。その内容は「動物組織内微量鉛定量」と題して京都医学雑誌（大正一四年）八月号に発表されたが、先生の努力によりそれまで原因不明であった小児脳炎の要因が明確になったのである。この業績は医療の面でも大きな貢献であって、それ以来幼児の尊い生命が救われるに至った。

このように分析化学に深い関心を示された先生は一九二七（昭和二）年、「金属元素の微量分析」に関する論文を京都帝国大学に提出し、理学博士の学位を得ておられる。先生は一九一六（大正五）年から一九二八（昭和三）年まで京都帝国大学理学部の嘱託講師として分析化学の講義を担当した。昨今でこそ私学の教授が旧帝大で講義を担当することも

さして珍らしいことでないが、当時としてはまず無かったことで先生の学識の優秀さを示すものである。

同志社六十周年記念誌「我等ノ同志社」の中に中瀬古六郎著「同志社は日本の文化に如何に貢献したか」と題する一文が掲載されている。その中で先生は自分のことをつぎのように述べている。

我が国の自然科学界に始めて科学歴史の尊重すべきを説いて其の実物教訓を展示し、微量分析化学の新領域を輸入し来つたのもまたわが同志社人であった。



中瀬古六郎先生御夫妻

現在、大学の一般教育科目の中で「科学史」を設置しているところが多いが、これは先生を以て嚆矢とする。先生は一九二九（昭和四）年から八年間、第三高等学校において「科学史」の講義を担当した。先生は講義前に吉田山を徘徊して思索し、精神を統一してから講義に臨んだと聞いているが、その名講義ぶりは後々までの語り草であった。また同志社にあっては高等商業学校（昭和五年講師）、大学予科（昭和七年講師）、女子専門学校（昭和一三年講師）と多年にわたって「科学史」の講義を担当し、同志社教育に尽力したのである。科学史に関する著書としては、「世界化学史」、「近代化学史」「近代化学概観」その他多数の著書がある。また化学専門月刊雑誌「我等ノ化学」を創刊、その主幹を務め、さらには本誌、「同志社時報」の前身「同志社新聞」を一九〇五（明治三八）年に創刊し主幹を務めたことなどは、先生の文筆活動が非凡であったことを示すものであろう。

中瀬古先生は一九〇八（明治四一）年同志社女学校教頭、さらに一九一八（大正七）年には校長に就任し、同志社女子教育のために尽力した。現在女子部にあるジェームス館は米人A・C・ジェームス氏が一九一一（明治四四）年、同志社女子教育のため寄附した一〇万ドルの基金の中から建てられたものである。その辺の消息は「同志社五十年史」に詳述されているが、ジェームス氏は中瀬古先生の長年の知己であり、先生の渡来、留学にあたり物心両面の援助を惜まなかった人物である。寄附金申込の手紙も中瀬古先生に宛てられたものであり、その後の交渉も原田校長、中瀬古教頭、デントン女史の三人が中心となってあたっている。先生はその著書「近代化学史」の巻頭にジェームス氏の肖像を掲げて謝恩の意を表しておられる。

先生は教職以外にも同志社校友会長（二回）、理事（二回）を歴任したが一九四五（昭和二〇）年四月一四日、七六才の生涯を閉じた。墓は新島先生の墓の入口にあり、先年亡くなった次女和先生（元同志社女子大学教授）の名も見える。墓石には「死すともなほ活く」と刻まれている。「ともがら黙さば、かわって石が叫ぶ。」と聖書にある。先生の墓石は確かに何かを私達に語りかけているように思われてならない。

（大学工学部教授）